日本の初期リカード研究
―スラッファ解釈批判と部門別利潤率規定論―

福　田　進　治

はじめに

スラッファ編『リカードウ全集』の刊行以来、初期リカード解釈をめぐる問題は、リカード研究の焦点の一つとなった。スラッファは『リカードウ全集』「編者序文」(Sraffa 1951) において、初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈を主張したが、これに対して、ホランダーはスラッファの「穀物比率論」解釈を批判しながら、彼自身の「賃金－利潤相反論」解釈というべき立場を主張した (Hollander 1973; 1979)。これ以降、長期に渡って、欧米のリカード研究は、初期リカードに関する 2 通りの解釈の対立が、スラッファ派と新古典派の論争という様相を呈しながら激しさを増していくという状況によって特徴づけられることとなった。そして今日に至っても、激しい論争的状況はまったく解消していない。

ところで、同じ時期、日本のリカード研究の状況はまったく異なっていた。欧米での『リカードウ全集』刊行後、日本でもスラッファの「穀物比率論」解釈は直ちに紹介され、邦訳版の刊行以前から盛んに議論の俎上に乗せられ、やがて日本のリカード研究者たちから批判を受けることとなった。しかし日本では、その後、欧米のようにスラッファ派と新古典派の論争といった状況にはならず、むしろスラッファの解釈ともホランダーの解釈とも異なる「部門別利潤率規定論」と呼ばれる独自の解釈を生み出し、遅くとも1980年代初頭には、日本の主要なリカード研究者たちはこの解釈を支持するに至った (羽鳥 1982; 中村 1982; 千賀 1972)。

ここで重要なことは、日本のリカード研究の中で日本に独自の解釈が形成されたことよりも、欧米に見られたような激しい論争的状況に陥ることなく、この解釈が比較的短期間に事実上の支配的見解として確立したことである。もちろん、論争的状況に陥ることが必ずしも悪いと言うわけではないし、場合によっては、支配的見解が容易に確立することは学問的進歩の停滞を表していると言うべきかもしれない。しかしながら、初期リカード解釈をめぐる問題の場合、欧米に見られるような、党派的とさえ言える激しい論争的状況に陥らずに、独自の優れた解釈を確立させることができたことは、日本のリカード研究の誇るべき特徴ではないかと思われる。こうした欧米と日本の相違の原因は何なのだろうか。

こうして本稿の課題は、初期リカード解釈をめぐる問題を中心に、欧米のリカード研究の状況と比較しながら、日本のリカード研究の経緯と状況を検証し、その特徴を明らかにし、そのような状

況を生み出した原因を探ることである。このために以下では、日本でスラッファの「穀物比率論」解釈の批判が始まる1960年代から、日本独自の「部門別利潤率規定論」解釈が確立する1980年代までの議論を主として検討する。より具体的には、この時期の議論を先導した羽鳥卓也、中村廣治、千賀重義の議論を再検討しながら、彼等の議論の中で「穀物比率論」解釈が批判され、「部門別利潤率規定論」解釈が確立するまでの過程を整理し、この解釈の意義と限界を明らかにした上で、日本のリカード研究の特徴についてあらためて論じることとしたい。

1　欧米のリカード研究と日本のリカード研究

本章では、次章以下の議論の前提として、初期リカード解釈をめぐる問題を中心に、スラッファ編『リカードウ全集』刊行以降の欧米のリカード研究の状況と日本のリカード研究の状況を各々整理し、両者の状況を比較する視点を確保する。

まず、欧米のリカード研究について、およそ1950年代から60年代までは、スラッファの「穀物比率論」解釈の普及期と呼ぶことができる。先述のとおり、スラッファは1951年刊行の『リカードウ全集』「編者序文」(Sraffa 1951) において、初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈を主張した。次章で詳述するが、スラッファは初期リカードが農業部門における投入と産出はともに「穀物」のみから構成され、利潤率は価格決定に先行して、実物タームの「穀物比率」として決定すると考えていたという新解釈を主張した。この解釈は、当初、新古典派経済学の理論的枠組みに対して批判的だった非主流派の経済学者たちを中心に、好意的に受け止められ、急速に普及していった (Blaug 1958; Dobb 1973; Meek 1956; Tucker 1960)。

これに続く1970年代から80年代までは、初期リカード解釈をめぐるスラッファ派対新古典派の論争期と呼ぶことができる。ホランダーは1973年の論文「リカードの利潤率の分析－1813-15年－」(Hollander 1973) において、続いて1979年刊行の著書『リカードの経済学』(Hollander 1979) において、スラッファの「穀物比率論」解釈を文献的検証に基づいて批判した。その上でホランダーは、初期リカードが極めて早い時期に「賃金－利潤相反関係」を確立し、これに基づいて利潤率低下を論証しようとしていたという解釈を主張した[1)]。ホランダーは新古典派経済学の立場からスラッファの非主流派の理論的枠組みを批判しようとしたが、これを受けて、スラッファ解釈の「穀物比率論」解釈を支持する論者たちは、ホランダーのスラッファ解釈批判に対する反批判を展開していった (Bharadwaj 1983; Eatwell 1975; Garegnani 1982; Roncaglia 1982) [2)]。こうして初期リカード解釈をめぐる長期の激しい論争が始まったのである。

そして1990年代以降は、初期リカード解釈をめぐる三つ巴の論争期と呼ぶことができる。ピーチは初めに1984年の論文「リカードの初期利潤論－新解釈－」(Peach 1984) において、後に1993年の著書『リカードを解釈する』(Peach 1993) において、スラッファの「穀物比率論」解釈とホランダーの「賃金－利潤相反論」解釈を綿密な文献的検証に基づいて同時に批判した。そしてピーチは初期

リカードがアダム・スミスの誤った価格変化の原理に捕らわれ、動揺しながらも、利潤率低下を論証しようとして考察を進めた過程を明らかにした[3]。こうした解釈は現代経済学の諸学派の立場をリカードに投影することを批判し、リカード自身の視点を追求することを提起する解釈だったが、スラッファ派の論者たちからも、ホランダーからも反批判を受けることとなった（DeVivo 1994; Hollander 2001; Kurz 1994; Mongiovi 1994）。こうして1990年代以降、初期リカード解釈をめぐる三つ巴の論争が生じ、今日に至るのである。

こうした欧米の状況に対して、日本のリカード研究の状況はまったく異なっている。とはいえ、スラッファ編『リカードウ全集』刊行直後の1950年代から60年代初頭までは、日本のリカード研究においても、スラッファの「穀物比率論」解釈の導入期と呼ぶべき状況であった。当初、「穀物比率論」解釈は欧米の最新のリカード研究の成果として日本にも紹介され、欧米と同様、急速に普及していった（真実 1964; 時永 1955a; 1955b）。

しかし、日本では1960年代中葉には、早くもスラッファの「穀物比率論」解釈に対する批判期と呼ぶべき状況となった。羽鳥卓也は1965年の論文「初期リカードウの価値と分配の理論」（羽鳥 1965）において、スラッファの「穀物比率論」解釈を明確に批判した。次章で詳述するように、羽鳥はこの論文でスラッファが提示した「穀物比率論」解釈のための文献的証拠が必ずしも正当化できないことを指摘したが、この論文がホランダーの1973年の論文よりもはるかに早い時期に発表されていることに注目するべきである。そしてこの後、中村廣治を始めとして、日本の多くのリカード研究者たちは、欧米でホランダーの批判が始まる頃には、およそ一様に「穀物比率論」解釈に批判的な立場を取るようになっていたのである（中村 1968; 1974; 千賀 1972）[4]。

さらに、日本では1970年代初頭には、日本独自の「部門別利潤率規定論」解釈の形成過程が始まり、その形成期と呼ぶべき状況となった。千賀重義は1972年の論文「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」（千賀 1972）において、スラッファの「穀物比率論」解釈を批判しながら、初期リカードの利潤理論では、農業部門と製造業部門について別々の論理に基づいて利潤率の低下が論証されていると主張した。すなわち、初期リカードは農業部門では労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらし、製造業部門では貨幣賃金の上昇が利潤率の低下をもたらすと考えていたという。千賀の解釈は当初、中村からの批判を受けたが、羽鳥は千賀の解釈を基本的に支持し、やがて中村を含む日本の主要なリカード研究者たちは、一様にこの解釈を支持するようになった（羽鳥 1977; 1978; 中村 1982）[5]。

こうして1980年代初頭には、日本独自の「部門別利潤率規定論」解釈が確立し、その安定期と呼ぶべき状況となった。それ以来、日本ではこの解釈に対する有力な批判は現れず、むしろこの解釈を前提として、初期以降のリカードの議論の発展の過程、とくにリカードの労働価値理論の形成過程に関する研究が精力的に進められることになった。後述するように、筆者自身は「部門別利潤率規定論」解釈を全面的に支持することには躊躇を憶えるのであるが、少なくとも欧米のリカード研究と比較したとき、それが日本のリカード研究に独自の優れた研究成果であることに疑いを差し挟む

表１　欧米のリカード研究と日本のリカード研究の比較

<table>
<tr><th></th><th>欧米のリカード研究</th><th>日本のリカード研究</th></tr>
<tr><td rowspan="5">1950年代
1960年代
1970年代
1980年代
1990年代</td><td rowspan="2">「穀物比率論」普及期</td><td>「穀物比率論」導入期</td></tr>
<tr><td>「穀物比率論」批判期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">スラッファ派対新古典派論争期</td><td>「部門別利潤率規定論」形成期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">「部門別利潤率規定論」安定期</td></tr>
<tr><td>三つ巴論争期</td></tr>
</table>

余地はまったくないと思われる[6)]。

以上のとおり、欧米のリカード研究の状況と日本のリカード研究の状況を整理した。これらの概要を図式化して表したのが、上の表１である。このように日本のリカード研究においては、欧米よりも早い時期にスラッファの「穀物比率論」解釈を批判し、しかも欧米に見られるような激しい論争的状況に陥らずに、早い時期に独自の支配的見解である「部門別利潤率規定論」解釈を確立した。後述するように、日本の多くのリカード研究者たちは現代経済学の諸学派の視点よりも、リカード自身の視点を重視するという意味で、リカードの立場に内在的であることに務めてきた。こうしたリカード研究の指針は、欧米ではピーチが採用したものに近いと言えるが、日本ではピーチの研究よりもはるかに早い時期から採用されてきたのである。こうした研究はどのようにして可能になったのだろうか。次章以下では、日本のリカード研究の経緯を具体的に検証しながら、この問いに対する答えを探っていきたい。

2　スラッファの「穀物比率論」解釈とその批判

本章では、スラッファの「穀物比率論」解釈を今一度振り返り、その要点を確認した上で、羽鳥卓也の1965年の論文に始まる日本のリカード研究者たちによる「穀物比率論」解釈の批判を検証し、日本のリカード研究における「穀物比率論」批判期の議論の詳細を明らかにする。

周知のとおり、スラッファは『リカードウ全集』「編者序文」(Sraffa 1951) において、1814年の複数の書簡と1815年刊行の『試論』に見られる初期リカードの利潤理論の「基本原理」は、1814年３月のトラワ宛書簡 (48) に見られる「他のあらゆる産業の利潤を調整するものは、農業者の利潤である」(RW, VI, p.104) という命題にあると述べた上で、この命題の「合理的基礎」は、農業部門では投入と産出がともに「穀物」のみから構成され、利潤率が「穀物比率」として決定するという論理にあると主張した (Sraffa 1951, p.xxxi)。スラッファはこうした解釈を正当化する直接的な証拠が現存する文献の中に見出せないことを認めながらも、こうした論理が「失われた論文」または会話の中で提示されていたに違いないとして、そのことを示唆するという３つの間接的な証拠を挙げた。第１に1814年８月のマルサスのリカード宛書簡 (54) に見られる以下の叙述である。

「どんな生産の場合にも、生産物が前貸しされた資本とまったく同一の性質をもつということはありません。したがって需要とは無関係な、そしてまた資本の豊富あるいは不足といったこととは無関係な生産物の物的比率について述べることは決して正当ではありえません。」(RW, VI, p.117)

この叙述の中の「物的比率」こそ、彼のいう「穀物比率」を意味すると看なしながら、スラッファはこの叙述をリカードが採用していた「穀物比率」の概念をマルサスが批判したものであると主張した (Sraffa 1951, p.xxxi)。第 2 に1814年 6 月のリカードのマルサス宛書簡 (50) に見られる以下の叙述である。

「利潤率と利子率とは、生産にとって必要な消費に対する生産の比率に依存しなければなりません。この比率はまた、本質上、食糧の安価さに依存しており、この食糧の安価さこそ、我々が [その作用に] どのくらいの時間を認めようと自由ですが、結局、労働賃金の一大調整者であります。」(RW, VI, p.108)

この叙述の中の「生産の比率」こそ「穀物比率」を意味すると看なしながら、スラッファはこの叙述をリカードが「穀物比率論」に接近していたことを示す「印象的な章句」であると主張した。第 3 に1815年 2 月刊行の『試論』冒頭に見られる「穀物」表示の議論、とくにその集約的表現と言える「地代と利潤の増進を示す表」(RW, IV, p.17) である。リカード自身が提示した表を整理して、その一部を抜き出したものが下の表である。

表 2　地代と利潤の増進を示す表

				第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期
土地 [1]	投入 産出	200 q 300 q	利潤 地代	100 q 0 q	86 q 14 q	72 q 28 q	60 q 40 q	50 q 50 q
土地 [2]	投入 産出	210 q 300 q	利潤 地代		90 q 0 q	76 q 14 q	63 q 27 q	52.5 q 37.5 q
土地 [3]	投入 産出	220 q 300 q	利潤 地代			80 q 0 q	66 q 14 q	55 q 25 q
土地 [4]	投入 産出	230 q 300 q	利潤 地代				70 q 0 q	57.5 q 12.5 q
土地 [5]	投入 産出	240 q 300 q	利潤 地代					60 q 0 q
			利潤率	50%	43%	36%	30%	25%

この表の中でリカードは、各土地の投入と産出を「穀物」で表示しながら、農業利潤率を各期の限界地における純産出 (＝産出－投入) と投入の「比率」として算出している。表の中の [q] は穀物量の単位「クォータ」である。スラッファはこうした計算法がリカードが「穀物比率論」に接近していたことを表していると主張した。これらを文献的証拠として、スラッファは初期リカードは「穀物比率論」を採用することによって、価格決定の問題に関与されることなしに、利潤率の低下を論証することができたと主張したのである (Sraffa 1951, p.xxxii) [7)]。

こうしたスラッファの「穀物比率論」解釈に対して、羽鳥卓也は「初期リカードウの価値と分配の理論」（羽鳥 1965、羽鳥1972に所収）において批判を展開した。羽鳥は1814年のリカードとマルサスの往復書簡を検討し、スラッファのいう第１の文献的証拠である書簡（54）の中の「物的比率」はマルサスのリカード解釈に含まれる概念にすぎず、リカードがこの概念を採用していたことを示すとは言えないと指摘した。同じく第２の証拠である書簡（50）の中の「生産の比率」は抽象的な表現にすぎず、必ずしも「穀物比率」を意味するとは言えないと指摘した。これらより、羽鳥は1814年段階のリカードが必ずしも「穀物比率論」を採用していたとは言えないとして、スラッファの解釈に疑問符を付した（羽鳥 1972, pp.197-98）。また羽鳥は1815年の『試論』冒頭の議論を検討しながら、リカードは確かに投入と産出を「穀物」で表示したが、これは投入と産出がともに「穀物」のみから構成されると想定したものではなく、むしろ穀物以外の資本財の投入を考慮した上で、それらが穀物量で測定され、表示されると想定したものであると主張した[8)]。こうして羽鳥は1815年の『試論』については、リカードは「穀物比率論」を採用していなかったとして、スラッファの解釈を明確に否定した（羽鳥 1972, p.200）。羽鳥によると、リカードが穀物量での測定を想定したことは、穀物を価値尺度として採用したことを意味し、これは当時のリカードがスミスの支配労働価値説を克服していなかったことを表している。こうしたリカードの議論は必然的に不完全であり、このためにリカードは、穀物の価値が上昇したとき、穀物量で測定した穀物以外の資本財の価値が低下するという問題を看過するとともに、商工業利潤率の低下の論理を説明できないままに終わったという（羽鳥 1972, pp.201-10）。なお、羽鳥は同じ『試論』に見られる価格決定の原理に基づく議論（RW, Ⅳ, pp.19-20）については、補足的な議論にすぎないとし、『試論』後のマルサスとの論争を経て、リカードはスミスの支配労働価値説を克服し、分配理論を労働価値理論の基礎の上に再構築することになったと考えた（羽鳥 1972, p.219, 235）。

こうした羽鳥の議論を踏まえて、中村廣治は「リカードウ『経済学原理』の生成過程」（中村 1968、中村 1975に所収）において、スラッファの「穀物比率論」解釈に対する批判をより体系的に展開した。中村はやはり1814年のリカードとマルサスの往復書簡を検討し、スラッファのいう第１の文献的証拠である書簡（54）の中の「物的比率」は、あまりにも一般的な表現であり、これを「穀物比率」の意味に限定することはできないと主張した。リカードが同じ1814年８月のマルサス宛書簡（55）で「物質的生産」を重視することを正当化したことからも（RW, VI, p.121）[9)]、マルサスはリカードの実物的接近の方法を批判したにすぎないという（中村 1975, pp.55-56）。また中村は第２の証拠である書簡（50）の中の「生産の比率」には実物タームの概念と価値タームの概念が混入しており、純粋に実物的概念である「穀物比率」とは言えないと主張した。中村によると、リカードはこの書簡（50）の中で、一方では実物タームで、資本量一定の下での穀物輸入の制限は「生産」を減少させると述べながら、他方では価格タームで、食糧の安価さが「生産の比率」を低下させると述べており、２通りの議論が混在している[10)]。しかし、こうした不完全さを残しながらも、リカードはここで「賃金－利潤相反関係」の基礎を獲得したのでり、彼自身の不完全さを克服するために、労働価

値理論への接近が必要となったという（中村 1975, pp.60-62）。

さらに中村は「リカードウ初期利潤理論の完成」（中村 1974、中村 1975に所収）において、1815年刊行の『試論』を検討し、スラッファのいう第３の文献的証拠を批判した。まず『試論』冒頭の「穀物」表示の議論について、中村はリカードは農業部門の投入と産出の同質性を仮定していなかったと指摘して、スラッファの「穀物比率論」解釈を批判すると同時に、リカードはスミスの支配労働価値説の立場に留まってはいなかったと主張して、羽鳥の見解を批判した。中村によると、むしろリカードは実物的接近の困難を認識していたからこそ、便宜的に穀物を価値尺度として採用したのである（中村 1975, pp.121-23）。しかし、リカードは交換比率を規制する法則を確立していなかったために、農業利潤率が商工業利潤率を規定する論理を説明できず、一般的利潤率の低下の論証には成功しなかった（中村 1975, pp.127-30）。また同じ『試論』の価格決定の原理に基づく議論について、リカードは商品の価値が「生産の難易」に規定されることに言及し、商工業利潤率の低下の論理を提示したが、ここでは農業利潤率の低下の論証には成功しなかったという。こうして中村は『試論』の２つの議論は各々難点を抱えており、さらに互い両立し難いと指摘しながら、こうした困難を克服するために、リカードは労働価値理論の形成というさらなる課題に向けて出発したと主張した（中村 1975, pp.132-35）。こうした中村の見解は部分的に羽鳥の見解を批判しながらも、羽鳥が先鞭を付けた検討をさらに推し進め、スラッファの「穀物比率論」解釈を否定し、初期リカードの利潤理論を、『試論』後のリカードが労働価値理論の形成に向かう出発点として積極的に位置づけようとする解釈であったと言うことができる。

3 「部門別利潤率規定論」解釈の形成

本章では、千賀重義の1972年の論文に始まる日本のリカード研究者たちによる「部門別利潤率規定論」解釈をめぐる議論を検証し、日本のリカード研究における「部門別利潤率規定論」形成期の議論の詳細を明らかにする。

すでに述べたとおり、千賀重義は「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」（千賀1972）において、初期リカードの利潤理論では、農業部門と製造業部門について別々の論理に基づいて利潤率の低下が論証されていると主張した。千賀はやはり1814年の往復書簡の中から、同年７月のリカードのマルサス宛書簡（53）に見られる次の叙述を引用した。

> 「『一定量の穀物を生産するために50日の労働ではなく、100日の労働を雇用する必要があることを知る』資本家は、100日間雇用された労働者たちが生活の糧として、以前に50日間雇用された労働者たちが受け取っていたものと同じ量の穀物で満足しない限り、以前と同じ分け前を自分のために留保することはできません。」（RW, Ⅵ, pp.114-15）

ここでリカードは農業部門では労働生産性が低下し、雇用労働者数が増大するとき、利潤率が低下すると説明している。これに続けて、千賀は1814年８月のリカードのマルサス宛書簡（55）に見ら

れる次の叙述を引用した。

「もし毛織物や綿製品の製造業者が、彼等が雇用している労働者に対して、より多く支払わなければならなくなりますと、同じ資本をもって同量の財貨を加工することができないことは事実でしょう。しかし彼の利潤は彼の財貨が作られたときに売られる価格にかかっていきましょう。」(RW, Ⅵ, p.120)

ここでリカードは製造業部門では1人当たり賃金が上昇し、労働者全体に支払われる賃金総額が生産物価格と比較して上昇するとき、利潤率が低下すると説明している。これらの書簡を検討しながら、千賀は、この時期のリカードの議論は農業部門では、実物タームで、労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらし、製造業部門では、価値タームで、貨幣賃金の上昇が利潤率の低下をもたらすという「部門別利潤率低下(規定)論」であったと主張したのである(千賀 1972, pp.88-89)。同時に千賀は、この時期のリカードの議論ははなはだ不完全であり、投入財価格または貨幣賃金の上昇率と生産物価格の上昇率の関係が明らかになっていないから、農業利潤率の低下も製造業利潤率の低下も正しく論証できていないだけでなく、農業利潤率と製造業利潤率が互いに一致することも論証できていないと指摘した(千賀 1972, p.90)。

また、千賀は同じ論文の中で、1815年刊行の『試論』についても検討した。千賀は『試論』冒頭の「穀物」表示の議論は、諸商品の価格を一定と仮定した、農業利潤率のみに関連する議論であると述べた上で、価格決定の原理に基づく議論について、独特の位置づけを行った。このために千賀は『試論』に見られる次の叙述を引用した。

「すべての商品の交換価値は、その生産の困難さが増加するにつれて上昇するものである。……だから、この増進が諸価格におよぼす唯一の影響は、農業上ないし製造業におけるあらゆる改良を別とすれば、すべての他の商品をその元来の価格にとどめておき、原生産物と労働の価格だけを騰貴させ、そうして賃金の一般的上昇の結果、一般的利潤率を低下させることにあるようである。」(RW, Ⅳ, pp.19-20)

ここでリカードは「生産の困難さ」を規定因とする価格決定の原理を導入しながら、一般的利潤率の低下の論理を説明しようと試みている。しかし千賀によると、この議論は生産物価格を一定と仮定しながら貨幣賃金の上昇を想定する議論だから、農業以外の部門にしか妥当しない。すなわち、農業部門では生産物である穀物の価格と貨幣賃金がともに上昇するのであって、しかも両者の上昇率の関係が明らかになっていないから、農業利潤率の低下は論証できていなかったという(千賀 1972, pp.91-92)。従って『試論』の「穀物」表示の議論は農業部門のみに関連し、価格決定の原理に基づく議論はリカード自身の意図に反して、製造業部門のみに関連することになる。こうして千賀は1814年の往復書簡に見られる議論と同様、1815年の『試論』の議論についても、農業部門では労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらし、製造業部門では貨幣賃金の上昇が利潤率の低下をもたらすという「部門別利潤率低下(規定)論」であったと主張したのである。これらの議論に見られる諸変数の関係を図式化するなら、次のとおりである。

農　業：労働生産性の低下 → 農業利潤率の低下
製造業：　　→ 穀物価格の上昇 → 貨幣賃金の上昇 → 製造業利潤率の低下

図１　初期リカードの議論の論理（千賀1972）

こうした議論は初期リカードの利潤理論の到達点と言うべきであろうが、上述のとおり、完成された分配理論にはほど遠かった。千賀によると、リカードは農業利潤率が一般的利潤率を規定するというドグマに固執しており、それはリカードの投下労働価値論の未成熟、あるいは一般的利潤率低下論の未完成を物語り、分配理論の曖昧さを残すものであったという（千賀 1972, pp.92-94）。そしてリカードの労働価値理論の形成過程はここから始まった。千賀は初期リカード研究の「妙味」はリカードが先行者たちの業績を乗り越えて、やがて労働価値理論の立場を樹立するに至る過程を明らかにすることにあると述べた（千賀 1972, p.113）。

こうした千賀の新解釈に対して、中村廣治は「Intermezzo－初期リカード利潤論にかんする千賀説の吟味－」（中村 1972）において批判的な見解を提示した。中村は千賀の議論においては、スラッファも言及した1814年６月のリカードのマルサス宛書簡（50）における議論の内容が考慮されていないと指摘した。以下に今一度引用する。

> 「利潤率と利子率とは、生産にとって必要な消費に対する生産の比率に依存しなければなりません。この比率はまた、本質上、食糧の安価さに依存しており、この食糧の安価さこそ、我々が［その作用に］どのくらいの時間を認めようと自由ですが、結局、労働賃金の一大調整者であります。」（RW, Ⅵ, p.108）

先述のとおり、中村はこの叙述の中の「生産の比率」には実物タームの概念と価値タームの概念が混入していると考えていた。しかし中村によると、リカードは農業部門に関する実物タームの議論と製造業部門に関する価値タームの議論という区別を採用しておらず、あくまで全部門一括で、実物タームと価値タームが混在する議論を展開していた。その上でリカードは、究極的に製造業利潤率を農業利潤率に帰一させようとしていたにすぎないという。こうして中村は少なくとも1814年の書簡におけるリカードの議論は「部門別」に展開された議論ではなく、従って初期リカードの利潤理論を、千賀の言うように「部門別利潤率規定論」として特徴づけることはできないと主張したのである（中村 1972, pp.9-11）。

こうした中村の千賀批判に対して、羽鳥卓也は「初期リカードウの利潤率低下論」（羽鳥 1977a; 1977b、羽鳥1982に所収）において、千賀に代わって事実上の回答を提示した。羽鳥は1814年の書簡（50）の中の「生産の比率」は農業部門の投入－産出比率の意味で使用されていたと述べた上で、同じ書簡の中の「この比率」は「生産の比率」ではなく、「利潤率と利子率」を指していると主張した（羽鳥 1982, pp.23-25, 43-44n）[11]。羽鳥によると、この書簡の中で提示されたのは、全部門について「食糧の安価さ」が「生産の比率」を規定し、「生産の比率」が「利潤率と利子率」を規定するという

完成された「賃金－利潤相反関係」の論理ではなく、むしろ農業部門では「生産の比率」が「利潤率と利子率」を規定し、商工業部門では「食糧の安価さ」が「労働賃金」と「利潤率と利子率」を規定するという「部門別利潤率規定論」の論理であるという（羽鳥 1982,p.42）。この論理を図式化するなら次のとおりである。

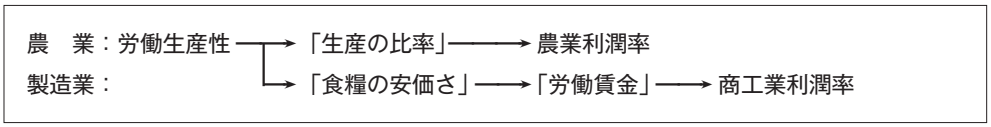

図 2　初期リカードの議論の論理（羽鳥1977b/1982）

こうして羽鳥は1814年の書簡（50）においても、リカードは「部門別」の議論を展開していたと主張することによって、中村の千賀批判に対する回答を提示し、千賀の「部門別利潤率規定論」解釈に対する支持を表明したのである。

さらに、羽鳥卓也は「リカードウ穀物モデル分配論とその変貌」（羽鳥 1978; 1979、羽鳥 1982に所収）において、千賀の新解釈を踏まえて、1815年刊行の『試論』を再検討した。羽鳥によると、『試論』冒頭の「穀物」表示の議論は、穀物を価値尺度とする農業利潤率低下論であり、これに続く価格決定の原理に基づく議論は、労働価値理論に基づく商工業利潤率低下論であった（羽鳥 1982, pp.69-70, 85-86）[12]。後者はやはり十分な一般的利潤率低下論、あるいはリカードの「完全な価値論の予示」（Sraffa 1951, p.xxxii）とは言えず、むしろ農業利潤率低下の論証に失敗した議論であったという。こうして羽鳥は1814年の書簡から1815年の『試論』までのリカードは、不完全さを残しながらも、一貫して「部門別」の議論を展開していたと主張して、千賀の「部門別利潤率規定論」解釈をほぼ全面的に支持したのである（羽鳥 1982, pp.87-88）。

また、当初、千賀の新解釈を批判していた中村廣治は「リカードウ初期利潤理論の完成と価値論の生成」（中村 1982）において、千賀と羽鳥の一連の議論を踏まえて、初期リカードの議論を再検討した。中村によると、1814年の書簡（50）においては、農業部門では実物タームの「生産の比率」が利潤率の低下をもたらし、商工業部門では価格タームの「食糧の安価さ」が利潤率の低下をもたらすという「二次元タームの複次的利潤率規定論」が展開されたという（中村 1975, p.8）。また1815年の『試論』でもほぼ同様に、農業部門に関する実物タームの議論と商工業部門に関する価格タームの議論が別個に展開されてたという（中村 1975, pp.19-20）。こうして中村は以前の彼自身の見解を修正し、千賀と羽鳥の「部門別利潤率規定論」解釈を支持した上で、こうした「部門別利潤率規定論」の不完全さの中に、リカードが労働価値理論の形成に向かう出発点を見定めようとした。こうした議論を経て、1980年代初頭には、日本独自の「部門別利潤率規定論」解釈が日本の初期リカード研究における事実上の支配的見解として確立したのである。

4 「部門別利潤率規定論」解釈の功罪

本章では、前章までの考察を踏まえて、スラッファの「穀物比率論」解釈と比較しながら、日本のリカード研究者たちの「部門別利潤率規定論」解釈の特徴を整理した上で、筆者自身の解釈を踏まえて、「部門別利潤率規定論」解釈の限界を明らかにする。

スラッファの「穀物比率論」解釈は多くの批判を受けてきたが、それにも関わらず、それはスラッファなりに初期リカードの利潤理論の構造を論理的に把握して、その独自性を提示しようとする最初の本格的な試みであったと言うことができるだろう。この解釈を前提として、スラッファは初期リカードの議論の発展過程を 2 種類の議論に分けて整理した。第 1 の「穀物比率論」に基づく議論は『試論』以前に見られたが、『試論』を最後に見られなくなった初期リカードに特徴的な議論であり、農業利潤率の主導的役割を説明する議論であった (Sraffa 1951, p.xxxi)。第 2 の価格決定の原理に基づく議論は『試論』以前は見られず、『試論』において始めて現れ、中期以降のリカードの議論の特徴づける議論であり、農業部門という制約を離れて、多部門経済について検討するために要請された議論であったという (Sraffa 1951, pp.xxxii-xxxiv)。このように初期リカードの議論の発展過程を整理した結果を図式化するなら次のとおりである。

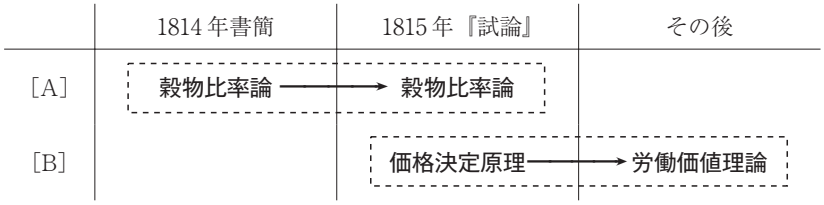

図 3　初期リカードの議論の発展過程（Sraffa 1951）

これがスラッファが描く初期リカードの議論の発展過程の概要である。ただし [A] は実物タームの議論であること、[B] は価値タームの議論であることを示している (以下同)。このうち実物タームの「穀物比率論」に基づく議論こそ、初期リカードに特徴的な議論であり、まさにその独自性を表す議論であったが、やがて価値タームの価格決定の原理に基づく議論、そして労働価値理論に役割を奪われていった。こうしてスラッファは中期以降のリカードの労働価値理論の立場から区別される、初期リカードの利潤理論の独自性を提示しようとした。しかし、スラッファの解釈は日本のリカード研究の成果と比較したとき、あまりにも明快な「穀物比率論」の形式に依拠して、初期リカードの議論を過度に単純化して捉えたものと言わねばならない。初期の「穀物比率論」に代わる価格決定の原理についても、スラッファは多部門経済における一般的利潤率の決定を説明するために要請され、以前の「穀物」に代わって「労働」が集計因子として採用されたものであるとしか説明しなかった (Sraffa 1951, p.xxxii)。ここでは中期以降のリカードの労働価値理論の意義は「穀物比

率論」を一般化するための道具として捉えられていたにすぎず、リカードの労働価値理論の固有の意義は十分に明らかにされなかった。

こうしたスラッファの「穀物比率論」解釈を否定した上で、日本のリカード研究者たちは「部門別利潤率規定論」解釈を提示したのである。彼等は初期リカードの利潤理論を、より丁寧に、より内在的に検討することによって、その発展過程の内実を解明しようと試みた。その結果、初期リカードの各段階における議論の中に、実物タームの議論と価値タームの議論が併存または混在していることが明らかになった。こうして「部門別利潤率規定論」解釈はその帰結として、初期リカードの議論の発展過程の中に、農業部門に関する実物タームの議論の系列と製造業部門に関する価値タームの議論の系列という２つの系列が見出せることを主張する[13)]。これら２つの系列はスラッファの解釈のように『試論』を転換点として明確に入れ替わるのではなく、1814年の書簡から1815年の『試論』にかけて、つねに併存または混在している。そして『試論』後、労働価値理論の形成過程が本格的に始まる。こうした整理の結果を図式化するなら次のとおりである。

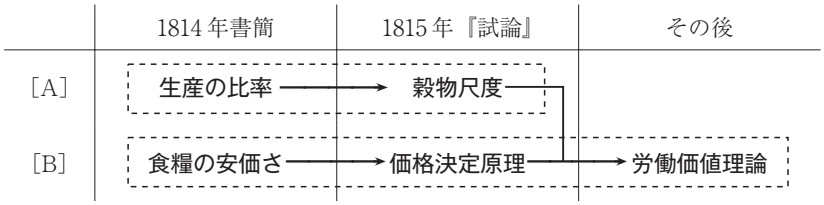

図４　初期リカードの議論の発展過程（千賀 1972 他）

こうした解釈における実物タームの議論の系列は、スラッファが主張した「穀物比率論」に基づく議論の系列と近いと言える。また価値タームの議論の系列は、ホランダーまたは当初の中村廣治が主張した「賃金－利潤相反論」に基づく議論の系列に近いと言える。この意味で、「部門別利潤率規定論」解釈はこれら２通りの初期リカード解釈よりも丁寧かつ慎重な解釈であり、同時にこれらの解釈の折衷案という性格をもつと言えるかもしれない。しかし、より重要な点として、この解釈は初期リカードの実物タームの議論と価値タームの議論には各々問題点が残され、ともに不完全な議論であったことを十分に明らかにした。そして何よりも、こうした初期の議論の不完全さを克服するために、リカードの労働価値理論の形成過程が始まることを説明しようとしたのである。こうして「部門別利潤率規定論」解釈は、実物タームの議論と価値タームの議論の両者を含む初期リカードの議論の内実をより丁寧に説明したこと、およびリカードの労働価値理論の形成過程に関わる理論的課題をより深く追求したことにおいて、欧米の諸解釈よりも明らかに優れている。しかしながら、初期リカードの議論の発展過程として、上記のように実物タームと価値タームに区別される一貫した２つの系列を描くことは本当に妥当であるか。とくに、実物タームの議論の系列は価値タームの議論と労働価値理論の発展のために十分に役割を果たしたと言えるか。これらの点について、

再検討する余地は残されていると思われる。

ところで、筆者は主として欧米のリカード研究の状況を踏まえて、初めに「初期リカードの利潤理論について」(福田 1996) において、後に『リカードの経済理論』(福田 2006) において、初期リカードの議論について再検討した。これらの研究を通して、筆者は欧米の諸解釈とも日本の「部門別利潤率規定論」解釈とも異なる見解に到達した。筆者の見解によると、ここまで検討してきた初期リカードの議論は 3 つの議論に分けて整理することができる[14]。第 1 に1814年の書簡 (50) と書簡 (53) を中心に見られる「生産の比率」と「食糧の安価さ」をめぐる議論は、確かに農業部門では労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらし、工業部門では貨幣賃金の上昇が利潤率の低下をもたらすという「部門別」の構成になっている。しかし、リカードはスミスの誤った価格変化の原理に捕らわれていたために、農業部門では貨幣賃金と生産物価格が比例的に上昇し、その結果、労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらすと主張したのである[15]。従って、リカードは農業部門について実物タームで議論したわけでなく、農業部門と工業部門の両者について、実物的要因を重視しながらも、あくまで価格タームで議論していたと言うべきではないか (福田 2006, pp.22-25, 34-35)。こうした議論の論理を図式化するなら次のとおりである。

図 5　初期リカードの議論の論理（福田1996/2006）

ここで農業部門では [ ] 内の穀物価格の上昇と貨幣賃金の上昇は互いに打ち消し合って、利潤率に対して影響を及ぼさないから、結果的に労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらすが、工業部門では同じ過程に含まれる穀物価格の上昇が、貨幣賃金の上昇と利潤率の低下をもたらすと想定されている。第 2 に1815年刊行の『試論』冒頭の「穀物」表示の議論は、穀物価格を一定と仮定した議論であり、事実上、実物タームの議論である。ただし、この議論は初めて差額地代の問題を扱ったリカードが、議論が複雑になりすぎることを避けるために価格変化の問題を捨象したものであって、1814年の書簡の議論とは独立の関心から生じたものである (福田 2006, pp.37-39)。第 3 に同じ『試論』の価格決定の原理に基づく議論では、確かに農業部門の利潤率低下の論証は失敗しており、工業部門の利潤率低下の論証のみが成功している。しかし、リカードは1814年12月のマルサス宛書簡 (70) において、労働生産性の変化に対して生産物価格が反比例的に変化することをすでに主張していた (RW, Ⅵ, p.163) [16]。従って、この書簡の翌年に執筆された『試論』において、リカードは農業部門の利潤率低下の論理を十分に正しく説明できなかったとしても、正しく説明しようと努めたのであり、少なくともその論理をある程度正しく理解していたのではないか。こうして、初期リカードの議論の系列は、1814年の書簡 (50) と書簡 (53) に始まり、同年末の書簡 (70) を経て、翌年

の『試論』に至る価格決定の原理の形成過程として捉えることができる（福田 2006, pp.40-41）。この段階のリカードの価格決定の原理は未完成であったが、この原理自体の確立と、この原理と差額地代の原理との統合が、その後の労働価値理論の形成過程の中で成就することになったのである。こうした整理の結果を図式化するなら次のとおりである。

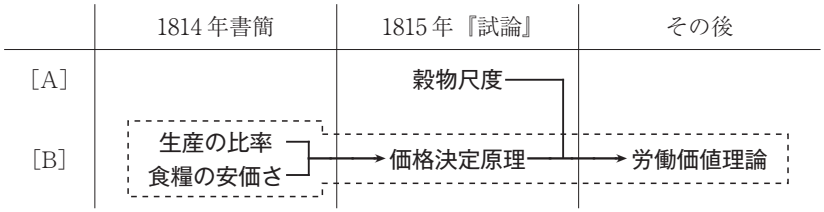

図 6　初期リカードの議論の発展過程（福田 1996/2006）

先述のとおり「部門別利潤率規定論」解釈では、初期リカードの議論の発展過程は農業部門に関する実物タームの議論と工業部門に関する価値タームの議論という一貫した 2 つの系列として捉えられていた。これに対して、筆者は上の図のように、初期リカードの議論の発展過程は価格決定の原理の形成過程を基軸とした全部門に関する価格タームの議論の系列であり、これらに実物タームの議論、または実物的要因を重視する議論が交錯するものとして捉えている。このように捉えた方が初期リカードの発展過程を無理なく説明できるように思われるが、しかし、軽々しく「部門別利潤率規定論」解釈は間違いであると判断することもできない。これらの解釈の成否に関わるであろう書簡（50）の「生産の比率」の含意や、『試論』で「穀物」表示の議論が採用された理由など、現存の文献的証拠によっては容易に判断できない要素が多すぎるのである。

5　日本のリカード研究の特質

前章までの考察を通して、初期リカード解釈をめぐる問題に限って言うなら、日本のリカード研究の成果と特質はある程度明らかになっただろう。本章では、こうした日本のリカード研究の特質を確認しながら、その成果と特質が生み出された原因を探るために、日本のリカード研究者たちの研究の指針または基本的立場に関する言明を整理してみたい。

まず、羽鳥卓也は『古典派経済学の基本問題』「あとがき」（羽鳥 1972, pp.411-22）において、彼自身の古典派経済学研究の指針を表明している。やや長い引用になるが、今日においても傾聴に値すると思われるので、その要点だけでも以下に示す。

> 「学史研究の究極の目的は、ただ単に過去の学説の内容を正確に理解することだけに局限されるべきではなく、そこから進んで、これを媒介にして資本主義経済のメカニズムの科学的分析にとって有効な迂回的手段を提供することにおかれなければならないであろう。」

「かりに、どれほど鋭い問題意識をもった批判的学史研究を企てたところで、対象それ自体に内在するという手続きを踏んでいなければ、古典派経済学説の虚像を描き出して、これを既成の理論によって裁断するというだけの結果に終わるほかないだろう。」

「わたくしは、本書において、資本蓄積論に焦点を合わせて、スミスからリカードウに至る古典派の理論史的展開を跡づけながら、学史上における古典派蓄積論の意義と限界とを明らかにしたいと念願していた……。」

「しかし、古典派蓄積論の意義と限界との解明という作業を企てようとする場合には、古典派の理論内容をマルクスの蓄積論と比較・対照させてその特質を明らかにしておくという試みが第一次接近として有効であろう。」(羽鳥 1972, pp.411-12)

このように言明した上で、羽鳥は彼自身が描くスミス＝リカード＝マルクスと繋がる剰余価値理論の系譜について概説し、とくにリカードについては「地代論を投下労働量による価値規定のうえに展開することによって古典派剰余価値論を首尾一貫した論理によって完成した」(羽鳥 1972, p.415)という評価を与えた。このように羽鳥は、1)「現代」の資本主義経済を分析することを究極の目的としながら、2)過去の研究対象に「内在」する手続きを踏むこと、3)古典派の理論史的展開を跡づけること、4)古典派をマルクスと比較・対照させることを具体的指針として、5)リカードにおける「古典派剰余価値論」の完成を説明することを目指したのである。

また、中村廣治は『リカァドウ体系』「はじめに」(中村 1975, pp.1-2)において、彼自身のリカード研究の指針を示し、同時のその研究方法の要点について簡潔に、しかし具体的に述べた。次のとおりである。

「本書は、このような時代に生き、その時代の課題に敏感に反応しつつ、生成し、確立するリカァドウ体系を追跡するうちに、スミスからリカァドウにいたる古典派経済学展開の軌跡を、いわばこの個体発生のうちに、その系統発生を、およぶ限り綿密に、しかも展開の筋道に注目しつつ解明し、これに基づいて、リカァドウ体系の内的編成を照射することを目的とするものである。」

「本書のこのようなアプローチからして、叙述はすぐれてリカァドウに内在し、ときどきの主要著作を環節とし、おりおりの書簡がこれを連還する役割を果たしつつ進められるだろう。リカァドウがそれぞれの時期＝段階に到達しえた理論的な高み＝深みを確定しつつ、しかもそのうちにはらまれる展開の内的動員の剔抉につとめながら。」(中村 1975, pp.1-2)

このように中村は、1)古典派経済学の展開の軌跡を解明することと関連づけながら、2)リカード体系の内的編成を解明することを目指し、そのための指針として、3)リカードに「内在」することに言及した。そしてリカードに「内在」することとは、①リカードの主要著作だけでなく、それらを繋ぐ書簡の役割に注目しつつ検討すること、②リカードの各時期における理論的到達点を確定すること、③リカード自身の内的動員を解明することを意味している。本稿で見たような日本のリカード研究者たちの初期リカード研究、あるいは本稿では扱えなかった彼等のリカード労働価値理論研

究の成果は、このような方法を用いて生み出されたものだった。

先述のとおり、千賀重義は「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」（千賀1972）において、初期リカード研究の「妙味」はリカードが労働価値理論の立場を樹立するに至る過程を明らかにすることにあると述べたが、後の著書『リカードウ政治経済学研究』「序言」（千賀 1989, pp.i-iv）において、あらためて彼自身の研究の指針と基本的立場について述べた。次のとおりである。

「本書は、経済学史の上で、アダム・スミスと並んで古典派経済学を代表するデイヴィド・リカードウの政治経済学を、彼の思考に内在しながら、しかも現代に生きるわれわれの観点から評価することを試みようとするものである。」

「われわれは前編において、実物的接近方法の目立つ初期のリカードウと、価値論を整備した後期のリカードウを比較することによって、リカードウ分配論における価値論の意義を検討することにする。」

「［後編において－引用者］総じてリカードウのなかに投下労働量による絶対価値の規定を読みとろうとする『剰余価値学説史』のマルクスと、価格水準の固定性を確保する手段としての不変の価値尺度という問題設定と結びついた政治経済学としてのリカードウ労働価値論の独自性を対比してみたいと思っている。」（千賀 1989, pp.i-iv）

このように千賀は、1）リカードウの思考に「内在」すること、2）リカードウの政治経済学を「現代」の観点から評価することを指針として、3）初期リカードの研究と関連づけながらリカードの価値論の意義を検討することを目指し、最終的には、4）リカードの価値論をマルクスの価値論と対比することを目指すと述べた。こうした研究の指針または方法は、先述の羽鳥と中村のものと基本的に共通している。千賀は欧米のリカード研究におけるスラッファ派対新古典派の論争から刺激を受けたとも述べたが、それでも「何と言っても本書が念頭においているのは、日本におけるこれまでのリカードウ研究――その中心主題は、リカードウとマルクスとの関係にあったと思われる――である」（千賀 1989, p.iv）と言明した。このように千賀の研究の指針と基本的立場は、日本のリカード研究の優れた伝統を受け継いでいると言えるだろう。

以上より、日本のリカード研究の基本的立場、あるいはその特質を次のようにまとめることができるだろう。第1に、リカードの経済学を何らかの党派的な立場から裁断することを避けて、リカード自身の視点を追求しながら、リカード自身の著作・書簡等に見られる議論を最大限「内在」的に検討することである。第2に、同時に、リカードの真実の姿をただ単に明らかにするだけで満足せずに、リカードの議論を現代的、理論的、理論史的視点から検討し、その「現代」的意義を評価することを目指すことである。第3に、リカードの労働価値理論の形成過程に注目し、それをマルクスの剰余価値理論と関連づけながら、その関連性または独自性を解明することを目指すことである。このように日本のリカード研究者たちは「内在」的視点と「現代」的視点という一見すると相互に矛盾する複数の視点を維持しながら、日本のリカード研究を推進し、とくにリカードの労働価値理論をめぐる問題の研究を中心に、欧米の諸研究よりも優れた成果を生み出してきた。そして、こ

のような研究を推進した根本的動機は、彼等のマルクスの剰余価値理論に対する関心にあったと言えそうである。だからこそ、本稿でたびたび示したように、日本のリカード研究者たちは初期リカードの利潤理論の研究に際しても、その中に労働価値理論の形成過程の出発点を見定めることに関心を集中し、より深く問題を掘り下げ、検討を進めることができたのである。

こうして日本のリカード研究の優位性は次のように整理することができるだろう。すなわち、日本のリカード研究においてはマルクスへの関心、従ってまた労働価値理論への関心が強かったために、欧米に見られるようなスラッファ派対新古典派といった激しい論争的状況は生じなかった。そのために、スラッファの「穀物比率論」解釈を初めとする欧米のリカード研究が生み出した諸解釈の功罪を冷静に見極めることができた。そして欧米の諸解釈よりも丁寧かつ慎重な日本独自の「部門別利潤率規定論」解釈を形成し、確立することができた。そしてこの解釈を土台として、リカードの労働価値理論の形成過程に関する研究を推進し、欧米には見られない優れた研究成果を生み出すことができたのである。しかし、このことは同時に、日本のリカード研究の限界を生み出しているのかもしれない。すなわち、日本のリカード研究においてマルクスへの関心が強かったことは、マルクスの立場を基準としてリカードの立場を裁断する恐れを生じないか。リカードの労働価値理論をマルクスの剰余価値理論と対比することに本当に成功しているか、あるいはリカードの労働価値理論の独自性を解明することに本当に成功しているか。また、初期リカードの利潤理論の独自性を提示しようとした欧米のリカード研究の成果は十分に吸収され、消化されているか。これらの問題と関わって、リカードの経済学への関心は十分に現代的であると言えるだろうか。

おわりに

スラッファ編『リカードウ全集』が刊行され、スラッファのリカード解釈が登場してから半世紀が過ぎたが、この間の欧米のリカード研究はスラッファの解釈の是非をめぐる論争に特徴づけられる。欧米のリカード研究はまさにスラッファ派対新古典派の論争の中で進行し、その結果として、リカード研究の高度化をもたらしたと言える。しかし長期の激しい論争はやがてリカード研究の停滞を生み出した。初期リカードの利潤理論の研究に限って言うなら、少なくとも最近20年間で、スラッファ派対新古典派の論争、あるいはピーチを加えた三者による三つ巴の論争に本質的な進展は見られず、各派の論者から同じ主張が繰り返されるばかりで、真に新しい意義のある研究成果はほとんど見当たらない。欧米のリカード研究では、その「現代」的視点があまりにも強いために、こうした論争的状況が続いているのではないかと思われる。

これに対して、日本のリカード研究はその研究史の初期からマルクス研究と関係が深かった。従って、その後の日本のリカード研究者たちがマルクスを強く意識し続けたことは当然の成り行きであろう[17)]。このことが幸いして、日本のリカード研究者たちは欧米のリカード研究の成果を吸収しながらも、スラッファ派対新古典派の論争に巻き込まれることなく、リカード自身の「内在」的視

点をより強く維持しながら、日本独自のリカード研究を推し進めることができた。こうして日本では、欧米よりも早い時期にスラッファの解釈を批判し、その功罪を見極めた上で、日本独自の解釈を確立することができた。そして何よりも、リカードの労働価値理論の形成過程に関する研究を進めることができた。しかしながら、このことは日本のリカード研究では欧米のリカード研究と比較して「現代」的視点が弱いということを意味するのかもしれない。

欧米のリカード研究では、1990年代になってようやく、ピーチがスラッファ派と新古典派の両者を同時に批判しながら、リカード自身の視点を追求し、リカードの歴史的本来の姿を明らかにすることを提起した。ピーチの「内在」的視点を重視する姿勢は、先行する日本のリカード研究者たちの姿勢に近いと言えるだろう。それだけでなく、興味深いことに、ピーチの労働価値理論の意義を強調する姿勢も、マルクスの立場を意識する姿勢も、日本のリカード研究者たちの姿勢に近いと言えるかもしれない[18)]。しかし、日本のリカード研究では「内在」的視点を重視することはいわば伝統的な研究の指針であったのに対して、スラッファ派の勢力が強い欧米では、ピーチの同様の指針の提起は正当に受け止められず、むしろ諸学派の論者からの批判を受けて、せいぜい三つ巴の論争の一角を占めるにすぎないという状況となっている。

以上のように、欧米のリカード研究はスラッファ派と新古典派の対立関係に特徴づけられるのに対して、日本のリカード研究はマルクス研究と関係が深かった。このために日本のリカード研究の状況は、欧米のリカード研究の状況とは大きく異なるものとなった。その中で、日本のリカード研究者たちは、欧米には見られなかった優れた研究成果を生み出すことができたのである。しかし、同じ事情が日本のリカード研究の限界を生み出す恐れがあると言わねばならない。日本のリカード研究では、いわばマルクスの視点に依拠することによって、早い時期にスラッファの視点を乗り越えることができた。今日、マルクスの視点を積極的に乗り越え、リカード研究をマルクス研究から真の意味で解放した上で、リカードの経済学の理論的意義または現代的意義をあらためて探求する時期に来ているのではないかと思われる。

［付記］本稿は平成18-19年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「日本のリカードウ研究史－比較史的視点を交えて－」（課題番号18530146、研究代表者　千賀重義）による研究成果の一部である。

注

1）ホランダーは穀物法論争前の1813年には、リカードは「賃金－利潤相反関係」の論理を確立し、これに基づいて新しい利潤理論を形成したと主張した（Hollander 1979, pp.117-18, 菱山・山下（訳）1998, p.156）。このとき一般的利潤率の低下は、農業部門の労働生産性の低下に伴う穀物価格の上昇と貨幣賃金の上昇の帰結として説明される。この解釈は中期以降のリカードの労働価値理論と本質的に同じ立場が極めて早い段階で成立したという含意をもつが、ホランダーにとって、リカードの労働価値理論は新古典派経済学と同じ資源配分メカニズムの働きに基づいて成立する（Hollander 1979, p.270-71, 菱山・山下（訳）1998,

pp.365-66)。この意味で、ホランダーの解釈は新古典派経済学の立場を意識しながら、スラッファの解釈を批判したものであると言える。

2) これらの諸文献はホランダーのスラッファ解釈批判に対する直接的な反批判であったが、DeVivo 1985はトレンズがリカードから継承した「穀物比率論」を採用していたと主張することによって、間接的に「穀物比率論」解釈を擁護した。Garegnani 1984 、Sraffa 1960は「穀物比率論」に象徴的に見られる実物的アプローチを、スラッファ派の「剰余理論」の核心的原理として位置づけた。これらに対して、Faccarello 1982 はホランダーの新古典派的な立場から距離を置きながらも、ホランダーのスラッファ解釈批判を参照しながら、スラッファの「穀物比率論」解釈をあらためて批判した。

3) ピーチはスラッファの解釈もホランダーの解釈も、ともに彼等自身の立場をリカードに投影しようとしたものであるとして批判し、リカード自身の立場からリカードを解釈することを提起した（Peach 1993, pp.xi-xii)。その上で、ピーチは初期リカードはアダム・スミスの価格変化の原理に捕らわれていたために、労働生産性の上昇に伴う穀物価格の上昇は投入財価格の比例的上昇をもたらし、その結果、農業部門の労働生産性の低下は農業利潤率の低下を帰結すると考えていたと主張した（Peach 1993, p.67)。このときスラッファが主張する「穀物比率」の仮定は必要でないし、ホランダーが主張する「賃金－利潤相反関係」は未完成であったと言える。こうした解釈は筆者も支持している（福田 2006, pp.30-35)。

4) この時期以降、本文中で扱う羽鳥、中村、千賀の諸文献の他にも、飯田 1974; 近野 1977; 丸山 1977; 岡本 1978; 横山 1977; 横山 1978 はスラッファの「穀物比率論」解釈を批判しながら、各々の視点から初期リカードの議論の発展過程について検討した。ただし、菱山 1979; 真実 1975 は一定の留保を置きながらも、「穀物比率論」解釈を支持し続けた。

5) 羽鳥、中村、千賀の諸文献の他にも、丸山 1984; 水田 1981; 島 1983; 島 1986は「部門別利潤率規定論」解釈を支持しながら初期リカードの議論について検討した。

6) 初期リカードをめぐる議論を含めて、この時期の日本のリカード研究の状況は、水田 1985 に詳しい。

7) スラッファの「穀物比率論」解釈の理論的含意は、彼自身が主張するように「総生産物と前貸しされた資本との間の差額による利潤の決定、および資本に対するこの利潤の比率の決定もまた、価値評価の問題とは何ら関わりなく、直接に穀物の分量間でこれをすることができる」(Sraffa 1951, p.xxxi）ところにある。これは新古典派経済学の価格と分配が同時決定する理論的枠組みを批判し、スラッファ自身の分配の決定が価格の決定に先行する理論的枠組みに歴史的正統性を与えることに繋がると考えられた。

8) リカードは『試論』冒頭で、「もしこんな土地に投下された一個人の資本が小麦200クォータの価値のものであり、その半分は建物、器具、等々のような固定資本、また他の半分は流動資本から成っているとする」(RW, Ⅳ, p.10）と述べて、穀物以外の資本財の投入を仮定していることを明らかにした。

9) リカードはマルサスの書簡（54）に対する返信として、書簡（55）において、「個人は物質的生産をもって彼らの利潤を評価しませんが、国民はいつも必ずそういたします」(RW, Ⅵ, p.121）と述べて、経済活動一般に対する実物タームの接近法を擁護した。

10) リカードは本文中でも引用した書簡（50）の前の部分で、「資本が増加しないのに、穀物の価格というよりも価値が上がりますと、穀物の価格にともなって他の商品の価格もたしかに上がり（徐々にですが）ましょうが、たとえこの上昇がなかったとしても、それらのものへの需要は必然的に少なくなります。資本が同じですと、生産も少なくなり、需要も少なくなりましょう」(RW, Ⅵ, p.108）と述べて、実物タームの生産が減少する過程に言及した。

11) 1814年９月のリカードのマルサス宛書簡（60)、同年10月のマルサスのリカード宛書簡（62)、同年同月のリカードのマルサス宛書簡（64）において、リカードとマルサスは「土地の生産の状態」、あるいは「土地の利潤率」について議論していた（RW, Ⅵ, pp.133, 140, 144-47)。これらの往復書簡における議論から、羽鳥はこの時期のリカードとマルサスが「生産の比率」と呼ぶものは、農業部門に関する実物タームの投

入－産出比率に違いないと推定した（羽鳥 1982, pp.23-25）。

12) 羽鳥は同じ論文で、リカードが「穀物」を価値尺度として採用した理由についても再検討した。マルサスからの穀物価格の上昇が利潤率の上昇をもたらすという批判に対して、リカードは1814年12月のマルサス宛書簡（70）において、「蓄積は必然的に生産を増やしますが、同様に消費を増やします。生産物の蓄積は選択さえ適切であれば、いつも資本の蓄積となることができましょうし、そして穀物または労働で測ると、それが要したもの以上に必ず値します」（RW, Ⅵ, p.164）と述べた。こうした議論から、羽鳥はリカードは貨幣価値の変化を排除し、市場法則を支持することによって、マルサスからの批判を回避するために、『試論』冒頭では「穀物」を価値尺度として採用したと主張した（羽鳥 1982, pp.26-34）。

13) 水田は「部門別利潤率規定論」解釈を前提に、初期リカードの議論の発展過程を「価値論なしの分配論の系列」と「価値論に基づく分配論の系列」に分けて整理した。そして1814年の段階で利潤率決定をめぐる分配理論を確立し、翌年の『試論』では地代範疇が追加された「価値論なしの分配論」が「価値論」によって整備されることによって、中期以降のリカードの「賃金・利潤・地代の分配論」が形成されたいったと主張した（水田 1981, pp.26-27）。

14) 筆者は以前の研究では、1814年３月の書簡（48）に見られる議論を含めて、初期リカードの議論を４つに分類して整理した。すなわち書簡（48）のスミスの資本競争の原理に基づく議論、書簡（50）と書簡（53）のスミスの価格変化の原理に捕らわれた議論、『試論』冒頭の穀物価格を一定と仮定した議論、同じ『試論』の価格決定の原理に基づく議論である。いずれにせよ、1814年から1815年初頭にかけての議論の中で、リカードは価格決定の原理を見出し、それを少しずつ整備していったのである（福田 2006, pp.44-45）。

15) リカードは本文中でも引用した書簡（53）において、「もし穀物の価格が倍になると仮定なさるならば、使用されるはずの資本も貨幣で評価すると多分ほとんど倍になりましょう、もしくはとにかく非常に増加するでしょうし、そして彼の貨幣収入が生産上の諸掛かりを支払った後に彼の手許に残るところの穀物の販売から出てくるものとすれば、彼の利潤が減少しないだろうと考えることがどうしてできますか？」（RW, Ⅵ, p.115）と述べた。ここでリカードはスミスの価格変化の原理に基づいて、労働生産性の低下が利潤率の低下をもたらすことを主張している（Peach 1993, p.67; 福田 2006, pp.30-35）。

16) リカードは注12）でも引用した書簡（70）において、「諸商品が大量に増大しますと、その交換価値は量の増加しなかった物と比べて減ることになります。仮に靴下の量を倍にする、というよりもそれを作る容易さを倍にしますと、他のすべての商品に比べてその価値は半分に減ることになります」（RW, Ⅵ, p.163）と述べて、労働生産性の変化に対して生産物価格が反比例的に変化するという中期以降の労働価値理論と本質的に同じ論理を主張した（福田 2006, pp.40, 57-58）。

17) 日本へのリカード研究の導入以来の経緯は、真実 1975 に簡潔に解説されている。真実は「戦前のわが国のリカード導入史は、マルクスに対する賛否にかかわらず、マルクスの影としてのリカード導入という特異性をもってきた」（真実 1975, p.192）としながら、さらに「戦後のリカード研究者に与えられた真の課題は、マルクスとスラッファとの整合的受容なのだろうが、そのためには、一方においてスラッファの十分な解釈を可能にすべくいま一度マルクスにたち帰ってリカードを読むことと同時に、他方においてマルクスをスラッファによって豊富化しながらリカードを読むことが必要になろう」(真実 1975, pp.193-94）と述べた。一方の課題は日本のリカード研究において、他方の課題は欧米のリカード研究において、ある程度進められたが、両者の統合にはほど遠いと言えるかもしれない。

18) ピーチはスラッファの解釈とホランダーの解釈を同時に批判しながら、リカード自身の立場からリカードを解釈することを提起しただけでなく、マルクスの『剰余価値学説史』におけるリカード解釈を評価し、一定の留保を置きながらも、リカードがマルクスの概念に近い「絶対価値」概念を保持していたと主張しながら、この点を評価した（Peach 1993, pp.239-40）。また、リカードの資本蓄積の分析の基礎として、マルクスの価値理論に近いリカードの純粋な労働価値理論が役割を果たすことを強調した（Peach 1993, p.273）。

参考文献

Bharadwaj, K. 1983, On a Controversy over Ricardo's Theory of Distribution, *Cambridge Journal of Economics*, 7, pp.11-36.

Blaug, M. 1958, *Ricardian Economics*, New Haven: Yale University Press. 馬渡尚憲・島　博保（訳）1981『リカアドウ派の経済学』木鐸社

DeVivo, G. 1985, Robert Torrens and Ricardo's Corn-Ratio Theory of Profit, *Cambridge Journal of Economics*, 9, pp.89-92.

DeVivo, G. 1994, (Mis) interpreting Ricardo, *Contributions to Political Economy*, 13, pp.29-43.

Dobb, M. 1973, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith*, Cambridge: Cambridge University Press. 岸本重陳（訳）1976『価値と分配の理論』新評論

Eatwell, J. 1975, The Interpretation of Ricardo's Essay on Profits, *Economica*, 42, pp.182-87.

Faccarello, G. 1982, Sraffa versus Ricardo: The Historical Irrelevance of the "Corn Profit" Model, *Economy and Society*, 11, pp.122-37.

Garegnani, P. 1982, On Hollander's Interpretation of Ricardo's Early Theory of Profits, *Cambridge Journal of Economics*, 6, pp.65-77.

Garegnani, P. 1984, Value and Distribution in the Classical Economics and Marx, *Oxford Economic Papers*, 36, pp.291-325.

Hollander, S. 1973, Ricardo's Analysis of the Profit Rate, 1813-15, *Economica*, 40, pp.260-83.

Hollander, S. 1979, *The Economics of David Ricardo*, Toronto: University of Tronto Press. 菱山　泉・山下　博（訳）1998『リカードの経済学』全２巻、日本経済評論社

Hollander, S. 2001, On Cannibalism, Torture and Conspiracy: A Rejoinder to Dr Peach, *Cambridge Journal of Economics*, 25, pp.693-95.

Kurz, H.D. 1994, "*Interpreting Ricardo*", Terry Peach, *Europian Journal of the History of Economic Thought*, 1, pp.411-20.

Meek, R. 1956, *Studies in the Labour Theory of Value*, London: Lawrence & Wishart. 水田　洋・宮本義男（訳）1957『労働価値論史』日本評論新社

Mongiovi, G. 1994, Misinterpreting Ricardo: A Review Essay, *Journal of History of Economic Thought*, 16, pp.248-69.

Peach, T. 1984, David Ricardo's Early Treatment of Profitability: A New Interpretation, *Economic Journal*, 94, pp.733-51.

Peach, T. 1993, *Interpreting Ricardo*, Cambridge: Cambridge University Press.

Ricardo, D., Sraffa,P. (ed.) 1951-73, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols, Cambridge: Cambridge University Press.　堀　経夫他（訳）1969-99『デイヴィド・リカードウ全集』全11巻、雄松堂書店

Roncaglia, A. 1982, Hollander's Ricardo, *Journal of Post-Keynesian Economics*, 4, pp.339-59.

Sraffa, P. 1951, Introduction, in Ricardo, D., Sraffa,P. (ed.) 1951-73, vol 1, pp.xiii-lxii.　堀　経夫他（訳）1969-99、第１巻、pp.xxiii-lxxxiii.

Sraffa,P. 1960, *Production of Commodities by means of Commodities*, Cambridge: Cambridge University Press. 菱山　泉・山下　博（訳）1962『商品による商品の生産』有斐閣

Tucker, G.S.L. 1960, *Progress and Profits in British Economic Thought, 1650-1850*, Cambridge: Cambridge University Press.

福田進治 1996 「初期リカードの利潤理論について」『立命館経済学』45（1）、pp.96-126.
福田進治 2006 『リカードの経済理論』日本経済評論社
羽鳥卓也 1965 「初期リカードウの価値と分配の理論」『商学論集』34（3）、pp.91-151.
羽鳥卓也 1972 『古典派経済学の基本問題』未来社
羽鳥卓也 1977a「初期リカードウの利潤率低下論（Ⅰ）」『岡山大学経済学会雑誌』9（1）、pp.1-27.
羽鳥卓也 1977b「初期リカードウの利潤率低下論（Ⅱ）」『岡山大学経済学会雑誌』9（2）、pp.28-54.
羽鳥卓也 1978 「リカードウ穀物モデル分配論とその変貌（Ⅰ）」『岡山大学経済学会雑誌』10（3）、pp.33-64.
羽鳥卓也 1979 「リカードウ穀物モデル分配論とその変貌（Ⅱ）」『岡山大学経済学会雑誌』10（4）、pp.99-128.
羽鳥卓也 1982 『リカードウ研究』未来社
菱山　泉 1979 『リカード』日本経済新聞社
飯田和人 1974 「初期リカードウの価値と分配の理論」『明治大学大学院紀要』12、pp.191-203.
近野　登 1977 「リカードウ『利潤論』に関する一考察」『一橋研究』2（3）、pp.17-31.
丸山武志 1977 「初期リカードウの利潤理論」『経済学雑誌』76（6）、pp.52-72.
丸山武志 1984 「リカードウ利潤理論の形成」『経済学雑誌』85（2・3）、pp.87-107.
真実一男 1964 「リカードウ『経済学および課税の原理』」、内田義彦他（編）『経済学史講座1－経済学史の基礎－』有斐閣、pp.216-56.
真実一男 1975 『リカードウ経済学入門』新評論
水田　健 1981 「初期リカードウにおける価値論と分配論の関連」『経済学年誌』18、pp.9-30.
水田　健 1985 「リカードウ研究」『経済学史学会年報』23、pp.13-22.
中村廣治 1968 「リカードウ『経済学原理』の生成過程」『経済論集』20（1）、pp.1-29.
中村廣治 1972 「Intermezzo－初期リカード利潤論にかんする千賀説の吟味－」『経済論集』24（1）、pp.1-12.
中村廣治 1974 「リカードウ初期利潤理論の完成」『経済論集』25（5）、pp.1-23.
中村廣治 1975 『リカァドウ体系』ミネルヴァ書房
中村廣治 1982 「リカードウ初期利潤理論の完成と価値論の生成」『年報経済学』3、pp.1-21.
中村廣治 1983 「リカードウ初期利潤理論の解体と価値論の確立過程」『年報経済学』4、pp.1-22.
岡本利光 1978 「リカードウ『原理』成立過程における不変の価値尺度概念」『経済学年誌』15、pp.79-105.
千賀重義 1972 「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」『経済科学』19（3）、pp.91-114.
千賀重義 1980 「古典派経済学における分配論と価値論の関連」『横浜市立大学論叢　社会科学系列』31（2・3）、pp.193-215.
千賀重義 1989 『リカードウ政治経済学研究』三嶺書房
島　博保 1983 「初期リカードウの利潤理論」『研究年報経済学』45、pp.305-22.
時永　淑 1955a「リカード経済学の生成とその労働価値論との関連」『経済志林』23（2）、pp.1-39.
時永　淑 1955b「リカード『原理』とその労働価値論との関連」『経済志林』23（3）、pp.1-35.
横山照樹 1977 「リカードウ利潤理論の形成」『経済学論叢』25（3・4）、pp.137-161.
横山照樹 1978 「リカードウ『利潤論』の考察」『経済学論叢』26（5・6）、pp.58-82.